

令和7年度 “社会を明るくする運動”可児地区作文コンテスト

小学生の部

可児保護区保護司会 会長賞

「思いやりのシロツメクサ」

可児市立土田小学校 6年

永友 芭奈

テレビをつけると、ニュースではあたり前のように事件を報道していて、心がもやっとした。私にとって、ニュースで犯罪関連の話をするのがあたり前になってしまうほど、この世界には犯罪があふれている。なぜそんなことをするの？私には分からない。『人がかなしくなることはしない』と、だれでも習うはずなのに。犯罪を犯してしまうほどのきっかけがあったのだとしても、許されないこともある。なのに、どうして。でも、それは本人にしか分からないこと。だからせめて、思いやりの心はもってほしいものだ。そう言いつつも、私も犯罪を犯した人達と、同じかもしれない。

この間の道徳の授業で、だれかが困っていたら、声をかけるのは難しく、きんちゅうすることだけど、そんなときこそ勇気を出して声をかけて助けてあげようって学んだ。これはとても大切なことだから、私も守っていこうと決めた。決めたのに、友情関係で困っていた友達を、まきこまれたくないという気持ちに負けて、何も言ってあげれなかった。友達の顔が見れなくて、にげてしまった。かっこわるくて、なきれない。思いやりの心をもてなんて、こんな私に言うしかくはない。大きなため息について、散歩に行こうと外に出た。そしたら、どこからか泣き声が聞こえてきた。ふり返ると、5才くらいの男の子が、自転車と一緒に倒れて泣いていた。その時、道徳の授業を思い出していたからか、その男の子が少し昔の自分に似ていたからかは分からない。気づいたら、「だいじょうぶ！？」とその子のそばにいた。あ、私にも、だいじょうぶなんて声がかけられるんだ。私にも、思いやりの心があったみたいだ。男の子の家は、私の家の向かいだったため、自転車をおこして家まで送った。空がきれいなオレンジ色になっていた。

次の日、男の子が太陽みたいな笑顔で、私に会いに来た。小さな手で何かをにぎっている。その何かを、「ありがとう。」という言葉をそえて、私の手にのせた。それは、シロツメクサだった。他の人から見れば、どこにでもはえているようなただの草かもしれない。でも私にとって、そのシロツメクサは、世界に一人だけの男の子がくれた、世界に一つだけの宝物だ。そんなすてきな物を、男の子はくれたのだ。

犯罪を犯してしまった人達は、許されたいためだけに、反省するのではない。つらい思いをした人のことを一番に考えて、自分がしたことをもう一度見直して、その人達のためにも罪をつぐなわなければいけないのだ。自分が良いことをしたつもりでも、だれかの心をきず

つけてしまうこともあるかもしれない。そんなつもりはなかったなんて通用しない世界だから。周りにいた人も自分から離れていくかもしれない。自分を守ろうとして。一度犯してしまったら、その真実がくつがえることはない。でも、私達はみんな人間だ。真っ青にも真っ黒にもなるし、オレンジ色にもなる同じ空の下で暮らす人間。

私達は、今この時を一生懸命生きている。だからこの広い空の下で生きているかぎり、泣きたくなるようなつらい出来事に必ず出会う。それと同じくらい、うれしいことや心がおどることにだって出会う。自分にとって大切なものにも出会うことができるんだ。こうして、だれかがだれかを想い、そのだれかも、まただれかに想いをつなげて広げていく。これが人を救う「思いやり」の輪となって広がっていくことにつながるんだと思う。その輪に、どんなささいなことでも、思いやりの心をもち行動できる人が一人でも増えて、犯罪を犯す人が少なくなるといいな。